Ｈ３０年度　厚生労働行政推進調査事業費補助金
（慢性の痛み政策研究事業）
慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究
分担研究報告書

慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究

研究分担者　丸山　一男　三重大学大学院医学系研究科麻酔集中治療学　教授
研究協力者　横地　歩　　三重大学附属病院麻酔科　講師

研究要旨

当院では、慢性の痛みの集学的治療と教育の基盤となるシステム構築を、ペインクリニック外来の特性を活かしつつ展開してきた。特性とは、鍼灸外来、漢方外来、慢性疼痛心理外来を、併設している点であり、他科との協働や多職種連携に加え、東洋医学と西洋医学の統合、及び、医学と心理学の融合を目指しつつ、慢性の痛みの診療にあたっている。学際的治療に発展させていくことを目標にしているが、その一過程として、ペインクリニック領域での事例を、心理学中心の学会（日本認知・行動療法学会：抄録は1500字の論文集となる）で発表するという試みをパイロット的に試みている。心理学の倉庫には、“生活の知恵の束”が、実践的に蓄えられていると推察する。そして、医療の現場でも、実は、以前から、それなりに心理学的な工夫がなされてきているようである。認知・行動療法学会での事例報告は、両者の間の、ある種、言葉の壁を乗り越えていく試みである。この試みが、将来の、より適切な医療の提供につながっていく可能性に期待したい。

A．研究目的

本研究の目的は、慢性の痛み診療の内実を心理学の言葉や概念に落とし込む作業を通じ、集学的治療の内容を、向上させることである。

B．研究方法

日本認知・行動療法学会に、一例報告の形で、慢性の痛み事例に関する報告を行う。

（倫理面への配慮）

学会報告の目的と意義、個人情報の保護について説明し、文書で同意を得た。通常治療の一環であり、実験的なものではない。

C．研究結果

2015/10/仙台　幻肢痛発症直後の症状緩和を目的とした認知行動療法の一事例

2016/10/徳島　ｸﾛｰﾝ病の疼痛管理を目的とした認知行動療法の一事例(ﾓﾙﾋﾈ使用例)

2017/9-10/新潟　潰瘍性大腸炎の疼痛管理を目的とした認知行動療法の一事例(強ｵﾋﾟｵｲﾄﾞ使用例)

2018/10/東京　開胸術後疼痛症候群の疼痛管理を目的とした認知行動療法の一事例≪ｴﾁｿﾞﾗﾑ調節事例≫

D．考察

ストレス低減法、ペーシング等、日常診療で使用できるものがある。情報提供は、メタファーを使った心理教育の形に落とし込めるものがある。行動分析は重要なツールであり、例えば、習慣性薬物の減量等にも有用であった。しかし、行動分析の習熟には、いささか難渋している。

E．結論

困難もあるが、医師が行動療法の領域を学び実践すると、治療内容が向上する可能性がある。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載。

G．研究発表

1.論文発表

1)　上條史絵，丸山一男，横地歩，島岡要．三重大学／鈴鹿医療科学大学合同教育プログラム　－慢性疼痛多職種連携医療の進展に向けて－．三重大学高等教育研究．2019;25:9-22.

2.学会発表

1) 横地歩, 上條史絵, 丸山淳子, 小西邦彦, 丸山一男. 臨床心理士の併診で状況が改善したと感じた慢性疼痛の一例. 日本ペインクリニック学会. 2018.7, 東京
2) 横地歩, 上條史絵, 伊藤温志, 丸山淳子, 中　優太, 丸山一男, 三上勇気. 開胸術後疼痛症候群の疼痛管理を目的とした認知行動療法の一事例≪エチゾラム調節事例≫. 日本認知・行動療法学会. 2018.10, 東京

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1.特許取得
　なし
2.実用新案登録
　なし
3.その他
　なし